江南曹洞の系譜

佐藤秀孝

はじめに

江南とは漠然と長江（揚子江）以南の地を指すことばである。肥沃な土壌と温暖な気候、果てしなく続く田園に、長閑な人々、そんな悠久な中国南部の描写が脳裏を過る。禅家にいう「牧牛図」に描かれるような風景である。

ただ江南という地域の定義は、政治区画からいうと、時代的に変っているようで、唐代の江南道は、浙江・福建・江西・湖南の全域と、江蘇・安徽・湖北の長江以南の地、および四川の東南部・貴州の東北部を含む広域にわたっていた。これに対して、宋代の江南路は、江西の全域と、江蘇・安徽の長江以南という、かなり狭められた地域に限られている。

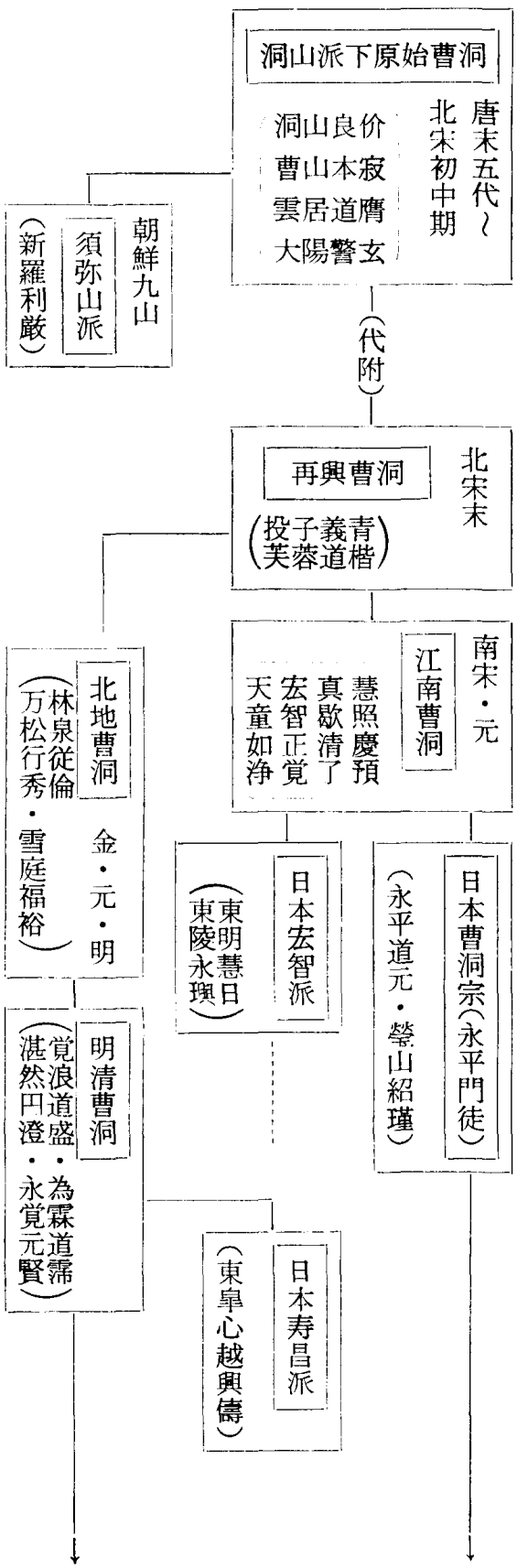
いま問題とするのは、広義の江南の地としながらも、南宋（1127～1279）の支配地、とくに江東の浙江・江蘇や福建といった、南宋の中心地域、とりわけ杭州（臨安府）や明州（慶元府、現寧波（ニンポー））、それに蘇州（平江府）などがその対象である。ましてや、江南一帯は、南宋代に国都が杭州に置かれたことにより、運河などの交通網の開鑿補強や農耕・産業の発展、学問・文化の進展といった、政治・経済・文化あらゆる面での躍進がめざましい。

つぎに江南曹洞（江南の曹洞宗）という定義が問題となる。周知のごとく曹洞宗は唐末に洞山良价（807～869）・曹山本寂（840～901）・雲居道膺（835？～902）らが江西省を中心に活動したことに端を発する。これが湖南に興った潙仰宗、河北に展開した臨済宗、広東に源を発する雲門宗、浙江や福建に法幢を掲げた法眼宗とともに、唐末五代に形成され、五家の一として確固たる地位を与えられるのである。

中国における曹洞宗の展開を時代区分と地域を基に図式すると、大きく次のようになる（ただし筆者分類）。

第一に唐末より北宋中末期に至る時期。これは洞山・曹山や雲居らより大陽警玄（943～1027）の法嗣に至る洞山派下

〔曹洞宗の展開略図〕（主要人物）



数代の時代で、江西・湖南を中心に幾分広い地域に展開したが、ついには衰微するに至る。これを洞山派下原始曹洞と称しておく。

第二に北宋末期。投子義青（1032～1083）の代附[1]を契機に再興され、芙蓉道楷（1043～1118）・大洪報恩（1058～1111）らを中心に、華中・江北（湖北・河南・山東）に進展した時期。これを代附に因んで再興曹洞と称しておく。

第三に南宋から元にかけて臨済宗楊岐派に互して、江南に進出展開した一派。これは真歇清了（1088～1151）・宏智正覚（1091～1157）に始まり、天童如浄（1163～1228）らを経て、元の雲外雲岫（1242～1324）などに至る人々の時代。これを江南曹洞と称しておく。

第四に、第三の江南曹洞と期を一にして北方金の地に進出し、その後、元・明と北地を中心に栄えた北地の曹洞の一派。これはとくに万松行秀（1166～1246）およびその門人雪庭福裕（1203～1275）や林泉従倫らを中心に大きく躍進している。これを北地曹洞と称しておく。

第五に明末より清、さらに現今に及ぶ流れ。これは北地曹洞の系統を引き、小山宗書（1500～1567）以降、明末清初にかなりの勢力を有し、北地から江南へも進出している。主要人物は湛然円澄（1561～1626）や永覚元賢（1578～1657）・覚浪道盛（1592～1659）など。これを明清曹洞と称しておく。

このうち、第一の洞山派下において、雲居道膺下に新羅の真澈大師利厳（870～936）らが出て、朝鮮の禅門九山の一、須弥山派を形成した。また洞山の下に日本の瓦屋能光（～933?）が参じているが、帰国することなく終えている。日本への流伝は、第三の江南曹洞が鎌倉・南北朝期に永平道元（1200～1253）・東明慧日（1272～1340）・東陵永璵(1285～1365)によって為され、また第五の明清曹洞が江戸初期に東皐心越興儔（1639～1696）によって伝えられている。

一

いま問題とするのは、このうち第三の江南曹洞の法統である。これは、第二の再興曹洞の流れの中の一派が、北宋末南宋初の動乱期に華中・江北から江南の地に南下進出したもので、真歇・宏智らを中心に、綿密なる打坐の実参を重んじる黙照禅と呼ばれる禅風を唱導鼓吹して展開するのである。

この派の展開は、まさに北宋末期より南宋初期に至る社会動向と期を一にして為された。北宋末、徽宗（1100～1125在位）の政治不安・不信と、北地の金（1115～1234）の興起、遼（907～1125）の滅亡などが相俟って、金軍による靖康の変（1127）が起り、宋は南遷を余儀なくされて、都を江蘇・浙江の地に点々とした後、臨安府（杭州）に定着する。こうした政治・社会の動向は、そのまま北宋社会に教線を拡張してきた禅宗をして、北地金の地と江南の南宋の地とに二分した格好をとらしめることになる。

北宋末まで文人士大夫の厚い帰依を受けて隆盛していた雲門宗と臨済宗黄竜派は、この宋の南遷以後、急速に衰退していく。これに反し、北宋末より次第に地方、とりわけ長江以南の安徽・江西などで勢力を得てきていた臨済宗楊岐派が、南宋社会に入って、新興士大夫との交流により新たに地盤を固めていくのである。とくに大慧宗杲（1089～1163）を中心とする一派が、国都臨安府を中心に浙江や福建の禅院に進出しており、また遅れて虎丘派も大勢力へと向うのである。

こうしたなか、曹洞宗も、北地金の支配地に北上する一派（北地曹洞）と、江南の南宋の地に下る一派（江南曹洞）とに大きく分かれ、しかもこの二派は、元によって統一された後も、ほとんど交渉をもつことなく独自の展開を為している。江南禅林に限って言えば、あたかも旧来の黄竜派が楊岐派に取って代られ、また雲門宗の衰えと曹洞宗の進出が期を一にした格好である。

江南に下った曹洞宗の人々の中で、特に注目すべきは、芙蓉道楷の嫡嗣丹霞子淳（1064～1117）派下の門流である。このほかにも枯木法成（1071～1128）・闡提惟照（1085～1128）・石門元易（1053～1137）らの系統もあるが、早くに断絶していることから、後世への影響から言っても、丹霞系が中心であり、その中でも慧照慶預（1078～1140）と真歇清了と宏

智正覚の三兄弟の名が特筆される。

この辺を押えられた論文としては、古く宇井伯寿博士に「投子義青とその以後の法系」（『第三禅宗史研究』所収）があり、のち新出資料を基に、この間の動向を大きく改めた論文が、石井修道先生により随時発表された。[2] ここでは石井先生の諸論文を踏えつつ、慧照・真歇・宏智の各門流のその後の盛衰と、その特質を中心に纒めてみたい。

資料としては、①灯史類。これには『聯灯会要』『嘉泰普灯録』『五灯会元』『続伝灯録』『増集続伝灯録』『五灯会元続略』『五灯全書』などのほか、新たに発見された『祖灯大統』といったものが於げられ、また僧伝として『大明高僧伝』『南宋元明禅林僧宝伝』『補続高僧伝』がある。②に語録。これには同時代の臨済系のものなどを含む。③に塔銘・行状類。[3] ④に禅僧や一般文人の文集。⑤寺誌。とくに五山・十刹などの主要禅刹。⑥に明清の一統志のほか、宋元以来の地方志。⑦に永平道元・祇陀大智（1290～1366）・別源円旨（1294～1364）などの日本の入宋入元僧の記録や、日本選述の『扶桑五山記』や宗派図なども考慮に入れなければならない。

二

まず、歴史的展開を簡単に眺めてみたい。

人物と地域・寺名、および時期（生没年）を基とした系譜を、資料に別出しておく。1は灯史類に見録の人。2は灯史類に名のみで無録の人（ただし後世整理して諸文献より名を集収している『五灯全書』の記載は考慮に入れていない）。3は語録・語要の存する人。（3）は存したことの伝えられる人。4は塔銘や行状などの存する人。5は特別の資料（師の塔銘や行状のほか、寺誌・語録・文集・日本撰述の宗派図など）にのみ見い出せる人。と分類しておく。（折込参照）

江南への曹洞の進出は、投子義青の法嗣大洪報恩の系統も含まれるが、大勢は芙蓉道楷――とりわけ丹霞子淳の系統である。その先駆けは、すでに北宋最末期に芙蓉下の枯木法成・闡提惟照・普賢善秀らがあり、遅れて真歇・宏智・慧照らが南下する。真歇の長蘆寺開堂が宣和五年（1123）、宏智の天童山入寺が建炎三年（1129）、そして慧照が湖北の大洪山より福建の雪峰山に移るのが、紹興四年（1134）である。

これより先、曹洞禅者の一大拠点は、随州（湖北省）西南一二〇里の大洪山保寿禅院であった。随州は宋の南遷の際、中原より逐われた漢民族が漢水に沿って南下し、塞柵を構えて自衛した地で、とくに大洪山はその拠点となっている。ここに北宋末以来、芙蓉道楷・大洪報恩およびその門下の人々が化を敷いていたわけである。随州が南遷後も南宋の北限として重要であった関係で、大洪山にはその後も江南曹洞の人々（系譜で随州大洪と付した人）や臨済宗楊岐派の人（老衲祖証など）で住持している人が知られる。この大洪山や襄陽

府の禅刹などを中心とする湖北省南部の地も、一応、江南叢林の北限とみてよいであろう。このほか四川もその中に含まれるのである。(4)

そこで先ず三兄弟の中の法兄、慧照慶預とその門流を眺めてみよう。慧照は真歇・宏智に比べると、ほとんどその名が知られていないが、

芙蓉道楷禅師、有三三賢孫一。近年以レ道鳴三於世一者、曰、慶預、曰、清了、曰、正覚。二公遊方時、預已坐三漢東両大刹一。(「随州大洪山第六代住持慧照禅師塔銘」)

於レ時而丹霞淳公其後尤大。今慶預在三大洪一、禅子至三二千一。清了在三長蘆一、正覚在三普照一亦至三千衆一。蓋天下三大禅刹。曹洞之宗、至レ是大振矣。(「随州大洪山崇寧保寿禅院十方第二代楷禅師塔銘」)

と記され、丹霞子淳生前の出世の門人として重きを為していた。はじめ随州の水南興国禅院や大洪山に化を振い、のち福州侯官県の雪峰山に南下している。嗣法門人は二〇余人、うち九人の名が知られる。門人も大洪山などに残る一派と福州に活動した人とに分けられる。このうち法統がしばらく続くのは、晩年の愛弟子孤峰慧深（？～1204）とその門人不群清越（？～1260）であり、雪峰山や鼓山に住している。(5)とくに清越は四〇年庵居の後、淳祐一一年（1251）に福州閩県の鼓山に開堂し、景定元年に示寂していることから、福建の曹洞、最後の人といってよく、この系統は南宋末で断絶したとみてよいだろう。

つぎに真歇清了とその派下であるが、真歇は真州（江蘇省）儀徴県南の長蘆崇福禅院（長蘆寺）を皮切りに、浙江・福建の大刹を歴住している。嗣法門人は三〇余人、うち名の伝えられる者は一三名。真歇の活動した地域に、門下の人を分類すると、

長蘆寺→補陀洛山（普）→雪峰山→育王山→
真州（江蘇省）　慶元府（浙江省）　福州（福建省）　慶元府
（妙覚慧悟　北山法通）　（大休宗珏）　（亀山義初　寿山徳初　神光道新）

蔣山→江心山竜翔寺→径山→崇先寺
建康府（江蘇省）　温州（浙江省）　臨安府（浙江省）　臨安府
（保寧興誉　移忠伝卿）　（能仁寿崇　竜翔道暉　幽岩了諒）　（澹堂徳朋）

となり、それぞれの地域に、門人が育成されていることが窺える。(6)このうち後世に展開するのは、慶元府を中心としていた天童大休宗珏（1091～1162）の系統のみであり、雪竇足庵智鑑（1105～1192）を経て天童長翁如浄（1163～1228）へと続くのである。いずれも慶元府（明州、現寧波）の地が中心であった。如浄の門下は九名が知られ、(7)ほぼ慶元府と蘇州を中心に活動しているが、ままに江西廬山の雪屋正韶（1202～

1260）や日本の永平道元（1200～1253）のような特異な活動を為した人もいる。ただ真歇の法統は、

唯、雲居之裔、繩繩而下、不レ絶如レ縷。至二第八代一曰二丹霞一、乃有二真歇・宏智一。而真歇数伝而後、亦罕レ聞二其人一。（「東明和尚塔銘」日仏全四八・三七〇a）

とあって、そう長くは続かなかったようである。おそらく如浄の法嗣の代で断絶したものとみられ、正韶が景定元年に示寂しており、孤蟾如瑩や無外義遠も咸淳年間（1265～1274）の始め頃までは活動していることが知られるが、元まで至らずに跡絶えたものとみてよいだろう。

奇しくも、その法統は、当時入宋して、如浄に見えた道元によって日本に導入され、のちに日本曹洞宗の一大動脈へと形成されていくのである。

さらに宏智正覚とその門流について眺めてみよう。宏智は泗州（安徽省）西の大聖普照寺に開堂して後、廬山の禅院や長蘆寺などを歴住し、のち慶元府鄞県東六〇里の天童山景徳禅寺に住すること三〇年に及び、その化導のさまは、

三十年間道俗欽仰、伝法之外、院宇一新。王公・大人楽二与レ之遊一、衲子奔輳如二水就レ下、常満二一千二百衆一。（「勅諡宏智禅師後録序」）

然則、師之所レ在、願下一二見威儀一聞二謦咳一、效二供養一誓中帰依上者、越二数百千里一襁負而至、外之履常踰二千数一。其弁道之勤・得道之多冠二一時一。（「宏智禅師妙光塔銘」）

と記され、寺宇を一新して俗人士大夫の帰向も一世に抽んじ、会下の大衆は常に一二〇〇衆にも満ちたとされ、臨安府余杭県の径山を中心に活動した楊岐派の大慧宗杲と並び称されるほどであった。

宏智の嗣法門人は「妙光塔銘」に二六名の名が伝えられ、『普灯録』などを通して、ほかに三名が知られる。(8) 雪竇山の聞庵嗣宗（1085～1153）、常州（江蘇省）善権寺の法智、長蘆寺の道琳、大洪山や天童山に住した法為、浄慈寺の自得慧暉（1097～1183）、瑞巌寺の石窓法恭（1102～1181）、光孝寺の了堂思徹などが名高い。その多くは江浙の禅林を中心としているが、ままに湖北などに化を敷いた人もみられる。宏智派は宏智とその門下の代にはかなり隆盛していたらしく、後代の史料として多少脚色はあるにせよ、

当二是時一大振二曹洞宗風一者、多出二宏智之門一。瑞巌有二石窓恭一、光孝有二了堂徹一、常州善権有二法智一、而聞庵居二翠巌一、法真居二清涼一。乃至大洪・長蘆皆属レ焉。以レ故浄慈典二職班序一者、半皆諸方弟姪。酧二唱叶諧一称為二新豊正韻一也。（『南宋元明禅林僧宝伝』巻六「浄慈自得暉禅師」章）

と示されるように、長蘆寺や大洪山は曹洞一色の感を呈し、淳熙三年（1176）に自得慧暉が臨安府銭塘県の南屏山浄慈報恩光孝寺に勅住した際においても、役位の僧の半数が曹洞系

であったとされる。なおいまだ真歇・宏智らの余勢を遺していたわけである。[9]

だが、この宏智派も、同じ浙江の禅林において、大慧下の拙庵徳光（1121～1203）派下（東庵下）など臨済系の活動が目覚しくなると、しだいに衰退していくのである。わずかに慧暉の系統のみが後代に受け継がれていったにすぎない。南宋末では東谷妙光（？～1253）と短篷遠（？～1247？）、元においては雲外雲岫（1242～1324）と無印大証（1297～1361）らが曹洞の孤塁を守っている。[10] 大慧派の南石文琇（1345～1418）は「天童雲外禅師伝」において、

洞上一宗之伝、独頼レ之。三韓・日本諸師亦嚮レ風趨慕、四方訪参者無二虚日一。（『雲外和尚語録』巻末）

と語り、雲岫の下には、日本や朝鮮の入元僧も多く参学していたことを伝えている。だが、この派の系統も、大証下の梨洲景雲を最後に江南禅林にその名をとどめない。ちなみに、

後事弟子聘大方・昇独木・省愚庵・証無印四人、足レ大二其宗一。但位不レ称レ徳、無下嗣二其法一者上。惟無印下僅有二一二人一耳。（『山庵雑録』巻上、「雲外和尚」章）

洞山之宗、至レ是不レ絶如レ線。得二師之為一亢レ宗、不幸遭二時艱棘一不レ得二大昌一其化一。為可二痛悼一。（『雪竇寺誌』巻六「無印証禅師行状」）

とあるから、元末明初の動乱に際し、不幸にして人材を得ることができず、意図むなしく衰滅していったことが知られる。そしてこれをもって江南曹洞の系譜は断絶したのである。ちなみに宏智派の日本への流伝は、直翁徳挙の嗣である東明慧日が鎌倉末の延慶二年（1309）に北条貞時の招聘で渡来、おくれて雲外雲岫の嗣である東陵永璵が観応二年(1351)に渡来し、鎌倉・京都の五山を中心に活動し、特に慧日の系統（東明派）は、室町末期まで日本五山唯一の曹洞系として一勢力を張ったことが伝えられる。[11]

ところで、この慧照・真歇・宏智らの系統は、ほぼ臨済宗の大慧派、続いて隆盛する虎丘派と同一地域（江蘇・浙江・福建）で展開し、しかも外護者（檀越）も同じ南宋の新興士大夫であった。またその盛衰は、中国における五山制度の成立期と重なる。官寺としての五山の寺格は、南宋の寧宗（1194～1224在位）の代に、宰相史弥遠（1164～1233）により制定されたとされ、[12] また私的には大慧宗杲の頃にその発端があったともされる。[13] 一応、史弥遠の制定とみるなら、宏智や真歇ら、および門下の人々の時代には、いまだ五山十刹の寺格は明確には定まっていなかったのであり、その後、曹洞系が衰えてきた頃に、明確な制定が為されたことになる。ただ、そうした大刹はすでに多く官寺として国家の統制下に在ったことは事実であるから、いまは一応、後に五山・十刹・

甲刹と称される官寺に進住している曹洞系禅者を列記してみると、およそ次のようになる。

〔五山・十刹・甲刹と江南曹洞禅者〕

五山

径山興聖万寿禅寺（浙江省臨安府余杭県西北50里）
　真歇清了
北山景徳霊隠禅寺（浙江省臨安府銭塘県西12里）
　宏智正覚・東谷妙光
太白山天童景徳禅寺（浙江省慶元府鄞県東60里）
　宏智正覚・大洪法為・大休宗珏・長翁如浄・雲外雲岫
南屏山浄慈報恩光孝禅寺（浙江省臨安府銭塘県西3里）
　自得慧暉・中庵重皎・古巌堅壁・長翁如浄
阿育王山広利禅寺（浙江省慶元府鄞県東50里）
　真歇清了・育王了默・東谷妙光

十刹

中天竺天寧万寿永祚禅寺（浙江省臨安府銭塘県西12里）
道場山護聖万寿禅寺（浙江省湖州烏程県南西12里）
蔣山太平興国禅寺（江蘇省建康府上元県東北）
　真歇清了
万寿報恩光孝禅寺（江蘇省蘇州呉県治東北）
　自得慧暉・石門法真・東谷妙光・簪渓了広
雪竇山資聖禅寺（浙江省慶元府奉化県西北60里）
　聞庵嗣宗・大休宗珏・雪竇清萃・自得慧暉・石窓法恭・足庵智鑑・雪竇徳雲・雪竇文煥・古巌堅壁・雪竇瑞・無印大証
江心山竜翔禅寺（浙江省温州永嘉県北）
　真歇清了（開山）・竜翔道暉
雪峰山崇聖禅寺（福建省福州侯官県西180里）
　真歇清了・慧照慶預・孤峰慧深・古巌堅壁
雲横山宝林禅寺（浙江省婺州義烏県南25里）
　短篷遠
虎丘山雲巌禅寺（江蘇省蘇州呉県西北7里）
　石林秀
天台山国清禅寺（浙江省台州天台県北）
華蔵褒忠禅寺（江蘇省常州無錫県西36里）
　明極慧祚・東谷妙光
仰山太平興国禅寺（江西省袁州宜春県南60里）
　仰山季
承天能仁禅寺（江蘇省蘇州呉県西南25里）
　短篷遠・孤蟾如瑩
金山竜游禅寺（江蘇省鎮江府丹徒県西北7里）
　枯木法成（続金山志）・金山堅
焦山普済禅寺（江蘇省鎮江府丹徒県北9里）
　枯木法成——→のちに明清曹洞の拠点に。
清涼広慧禅寺（江蘇省建康府上元県西2里）
　華薬智朋・長翁如浄
雁蕩山能仁普済禅寺（浙江省温州楽清県東90里）
　能仁寿崇・孤峰慧深
廬山円通崇勝禅寺（江西省南康府星子県西北20里）
　闡提惟照・宏智正覚・真際徳止

甲刹（曹洞禅者関係寺院のみ）

寿山本覚禅寺（浙江省嘉興府秀水県西27里）
東谷妙光
香山智度禅寺（浙江省慶元府慈溪県東35里）
大休宗珏・足庵智鑑
鼓山湧泉禅寺（福建省福州閩県東30里）
孤峰慧深・不群清越――→のちに明清曹洞の拠点に
長蘆崇福禅寺（江蘇省真州儀徴県南）
真歇清了・宏智正覚・妙覚慧悟・長蘆道琳
嵩山少林禅寺（河南省河南府登封県北10里）
――→のち雪庭福裕ら北地曹洞の拠点に。
曹渓山南華宝林禅寺（広東省韶州曲江県南60里）
枯木法成・南華明
鳳台山保寧禅寺（江蘇省建康府江寧県北1里）
保寧興誉
廬山東林竜興禅寺（江西省南康府星子県西北20里）
東林通理

これらの寺刹はすべて十方住持制をとっており、禅門諸派より陞住できるのであるが、曹洞下の人の住山は、臨済系諸派に比すれば、極めて微々たる存在であって、注目に価しない程の面もあるが、ともあれ、これによっても曹洞系がことさら官寺への進住を避けていたような節はみられない。はじめは真州（江蘇省）の長蘆寺や福州（福建省）の雪峰山が中心であったものが、しだいに慶元府（浙江省）の天童山や雪竇山、臨安府（浙江省）の浄慈寺などに進住する人がみられ、とくに雪竇山と曹洞系禅者の関連はかなり注目される。

では何故、江南の曹洞宗は一時期かなりの隆盛をみながら、ついには衰退の一途を辿り、綿々たる存在にならざるを得なかったのであろうか。

ひとえに人材が打出しなかったといえばそれまでだが、その理由の一因に宋代の中央集権的な官僚制の影響が挙げられる。南宋時代は、国の動揺や不安定な政治体制などから、国家的・民族的団結の機運はとみに高かまったとされるが、そのあおりが禅宗界へも強く影響し、官僚士大夫の参禅も多く、大禅院は国家の統制下に置かれ、五山機構という五山・十刹・甲刹の順位も定着する。当然、そうなると禅僧に官僚的意識が起り、職位の貴族化が生じてくる。すなわち名の通った長老に参じ、その人を師として修行し、大悟嗣法して大刹の重要職位に就き、のち小禅院の住持となり、さらに甲刹の住持を経て、十刹・五山へと進住していくという、一連の開堂出世の形態が決まってくるのである。

ここに、見性待悟を標傍し、より一般化した接化方法としての公案看話を用いていった大慧系の隆盛が、こうした体制と結びついていく一面があったものと思われる。ところが江南の曹洞宗が唱導した黙照禅は、悟りを待って修行し自己の本性を徹見するという立場を打ち出さず、実践打坐のありよ

うをそのまま道とみ、一挙手一投足をすべて悟の妙用としてとらえるのであり、大悟に対するとらえ方（修証観）が看話禅と相違していたのである。黙照の真意は容易に受け入れられない。そこには官刹としての性格を余儀なくされていた当時の禅宗寺院の時流には乗じ難い面がすでに存していたといってよく、黙照打坐では人材が輩出し難かったのではなかろうか。真歇や宏智の示寂した後、この集団が急速に衰退していくのにも、そうしたありようが偲ばれる。

三

では、この江南曹洞の人々は、どのような禅風をもって江南の地に活動していたか、いささか論じてみたい。

特徴ということで挙げるなら、第一に宏智が「黙照銘」を著わして唱導した黙照禅ということが問題になる。ちなみに「黙照銘」には、

黙黙忘レ言、昭昭現レ前。鑑時廓爾、体処霊然。霊然独照、照中還妙。露月星河、雪松雲嶠。晦而弥明、隠而愈顕。鶴夢煙寒、水含秋遠。浩劫空空、相与雷同。妙存黙処、功忘ニ照中一。（中略）黙唯至言、照唯善応。応不レ堕レ功、言不レ渉レ聴。万象森羅、放光説法。（下略）

とある。黙照の、黙は寂黙の意で、言句以前に黙々として坐ること、照は照用、心性の霊妙なはたらきをいう。坐禅の姿がそのまま仏光明の悟のありようであり、自己の本来性に親しむ姿であるとするのである。これはさらに、

渠非ニ修証一、本来具足。他不ニ汚染一、徹底清浄。正当ニ具足清浄処一、著ニ得箇眼一、照得徹、脱得尽、体得明、践得穏、生死元無ニ根蔕一、出没元無ニ朕迹一。本光照レ頂、其虚而霊。本智応レ縁、雖寂而耀。真到下無ニ中辺一絶中前後上、始得レ成ニ一片一。根根塵塵、在在処処、出ニ広長古一、伝ニ無尽灯一、放ニ大光明一、作ニ大仏事一。元不レ借ニ他一毫外法一、的的是自家屋裏事。（「明州天童覚和尚法語」大正蔵四八、七四a）

とあることにより、より明確になる。行住坐臥あらゆる行為がすべて悟りの顕現であるとみるのである。ただ、それは本来具足の悟の境界からとらえられるものであっても、日常不断の綿密な実参実修の中にこそ顕現するものであって、学仏道を経ない凡夫のままが認められる単なる無事禅ではない。

これは、真歇や宏智らが丹霞子淳の下で示された空劫以前の事とか空劫以前の自己、威音王那畔の事といわれるところから進展してきたものとみられ、宏智の「妙光塔銘」には、

蓋師初以ニ宴坐一入レ道。淳以ニ空劫自己一示レ之。廓然大悟、其後誨レ人、専明ニ空劫前事一。

とある。人間の思量以前の本来の姿（本証）から、修行というものをとらえていく、そこに江南曹洞、乃至、中国曹洞宗を通じた特質を認めてよいであろう。(14)

こうした黙照という本証（本覚）に裏付けられた修行とし

て、第二に江南曹洞の人々は坐禅をことさら重んじている。もちろん禅宗である以上、どの派でも坐禅を行うわけであるが、黙照禅者と呼ばれた江南曹洞の人々ほど万事を放下した綿密なる坐禅の姿に重要な意義を認めた集団はなかったといえる。これはすでに投子義青の「行状」に

唯破衲・弊衣・寒槁・冷黙・忘縁・寂照、坐臥如二竹林一而家風蕭条、無レ可二趣向一。（中略）然師之法子法孫、星分碁布、以二洞山門庭峻高一、得者如二大死人一而気息俱尽。（『舒州投子青和尚語録』巻下）

とあるから、宏智らより以前から、こうした孤高な打坐の気風がこの系統の人々の一大特色であったことが知られる。宏智においても、

入レ門禅毳万指、黙二座禅床一無二謦欬者一。（「宏智禅師行業記」）

而昼夜不レ眠、与レ衆危坐。（中略）自二初得戒一、坐必跏趺、食不レ過レ午。（「妙光塔銘」）

と記され、結跏趺坐して禅床に黙坐していたことが知られ、おそらくは達磨や魯祖宝雲に準えて枯木衆のごとき面壁が為されていただろうと察せられる。

参禅者身心脱落也、不レ用二焼香・礼拝・念仏・修懺・看経一、祇管打坐而已。（『宝慶記』）

という只管打坐を重んじた如浄の言は著名であるが、ほかにも、たとえば虎丘派の虚堂智愚（1185～1269）に、

首依二雪竇煥和尚・浄慈中庵皎和尚一公務外惟坐禅。二老撫愛常置二之左右一。（『虚堂録』巻末「行状」）

とあって、その参問のはじめ宏智派の雪竇文煥・浄慈中庵重皎に参じた折、二師は只管に坐禅をもって虚堂を指導したとされ、また同じく宏智派の承天短篷遠には、

短篷遠禅師、平生不レ設二臥具一昼夜枯坐、得二遠鉄橛之称一。（中略）時光東谷亦道行、一力起二洞上之宗一、無レ謂レ無レ人。（『枯崖和尚漫録』巻中）

とあって、坐禅を重んじ、鉄の橛を打ち込んだように枯坐するという意味の「遠鉄橛」の尊称を得たとさえ伝えられる。江南曹洞の人々ほど只管の打坐を重んじた門流はなかったといえよう。

第三に曹洞宗旨（とくに五位頌）の唱導が挙げられる。かつて大陽警玄・投子義青の代附を経た再興曹洞においては、曹洞意識が高まっていたものとみられる。大洪報恩には『曹洞宗派録』の著述すらあったとされる。これがさらに江南に下って、黙照の禅風を掲げて、臨済や雲門の流れとは別に一家を為す上に、曹洞意識がより強まったものとみられるのである。しかも南宋中期以降、門派が衰えるにつれ、臨済宗全盛の中で、曹洞の一宗は特異な門風として江南禅林でみられるようになっていく。もちろん、それは禅風・系統の相違であって、日本で考えるような宗派の違いではない。

灯史によれば、北地曹洞では五位の相承が重んぜられたとされるが、[15] 江南でも北地ほどではないが、やはり五位が重んぜられている。

語録や灯史、また『人天眼目』巻三などを通して挙げるなら、「偏正五位」（ただし四は兼中至）は丹霞子淳・普賢善秀・宏智正覚・大死翁景深・自得慧暉・聞庵嗣宗などにみられ、「功勲五位」は聞庵嗣宗、「王子五位」は宏智正覚・善権法智、「三参漏頌」は闡提惟照、「芙蓉楷門風偈」は自得慧暉、「四借頌」は宏智正覚、「五転位」は自得慧暉、といった具合になる。注目すべきはほとんどが宏智系であって、真歇系では五位の強調はみられないことである。ちなみに如浄・道元に五位頌の表示がみられないのも特徴的である。別に真歇の『信心銘拈古』や元代の雲外雲岫の『宝鏡三昧玄義』なども曹洞宗旨の宣揚にその意があったものとみられる。

この黙照禅の唱導と打坐の強調、曹洞宗旨の鼓吹という、三つの面を通して問題となってくるのが、第四に対看話禅の面である。

かつて紹興年中に大慧宗杲は、雪峰山の真歇らを対象に、

近年以来有二一種邪師一説二黙照禅一、教二人十二時中是事莫レ管休去歇去歇不レ得レ做レ声。（『大慧普覚禅師書』巻上「答陳少卿第一書」）

近世有二一種邪師一、自無二悟処一却言、本来無レ悟、悟是建立。只以下無二言説一不レ作レ声、為二空劫已前事一。我此会中兄弟往往有下曾中二其毒一者上。往年福州有二箇長老一也随レ分有二些声誉一。（四巻本『大慧覚禅師普説』巻三「方敷文請普説」）

とあるような黙照禅批判を開始し、その禅旨を大悟を撥無した枯木死灰の邪禅のごとくに評している。[16] それは偏えに大慧と真歇・宏智らとの証悟に対する捕え方の相違から来るものであろうが、真歇や宏智当時、曹洞禅者が対看話の面を力説した文献はみられない。ただ、真歇に『信心銘拈古』の作があるが、これに如浄下の無外義遠は、

当二紹興間一、妙喜正二統東山一詆二訾黙照一、寂菴是挙可レ謂、入二其室一操二其戈一取二其矛一撃二其盾一。覧者当二自得一之。義遠敬跋。（『真歇和尚信心銘拈古』跋）

と跋しており、この書が大慧の黙照批判に答え、かつ黙照の真意を示さんとした力作であったことを伝えている。[17]

ところが南宋も中期に入ると、大慧系が圧倒的に江南禅林を風靡するようになっていく。ここに曹洞禅者が対看話を意識し、その中で黙照の真意をとらえていかねばならない事情が生じてきたものとみられないか。その例を宏智の高弟自得慧暉と、わが道元の師天童如浄にみたい。

慧暉に「自得暉和尚六牛図」（一に輝自得六牛頌）の作がある。これは牧牛に託して「起信」「初入」「熏煉」「無妄」「超象」「還帰」という修証の深まりを説くものである。時

に看話禅の隆盛を背景に、一連の「牧牛図」が禅林に好まれていた。そうした状況を目の当たりにしていた慧暉が、自ら「六牛図」を示すことによって、信を基底とした対看話の面を強調したのではないか。それはまた曹洞系の堕し易かった、大悟を撥無した無事禅の亜流への警笛たる面をも含んでいた筈である。黙照の真意を如何に正しく示すかに、慧暉の苦悩があったとはいえないだろうか。(18)

また天童如浄に関しては、臨済・曹洞の観念にとらわれることを嫌い、生涯、嗣承を公表しなかったとされる。(19)『如浄録』の「明州天童景徳寺語録」に

上堂。心念紛飛如何措レ手。趙州狗子仏性無。只箇無字鉄掃帚、掃処紛飛多、紛飛多処掃。転掃転多、掃不レ得処拚レ命掃。昼夜竪二起脊染一、勇猛切莫二放倒一。忽然掃二破太虚空一、万別千差尽豁通。

という、「趙州無字」の古則を扱った上堂語が存するが、如浄は妄念を掃う手段として無字を唱導し、ついには尽界の真実相に通達することを説いている。また如浄下の承天孤蟾如瑩にも「蒙山異禅師示衆」に、

至二承天孤蟾和尚処一帰堂。(中略)三月初六日、坐中正挙二無字一。首座入レ堂焼香、打二香盒一作レ声、忽然団地一声、識二得自己一捉二敗趙州一。(『禅関策進』「諸祖法語節要」)

とあって、無字の則が学人接化の方法として行なわれていたことが知られる。さらに宏智派の短篷遠にも、虎丘派の無準下の雪巌祖欽(?〜1287)の懐古として、

十八歳行脚、鋭レ志要二出来究一明此事一。在二双林鉄橛遠和尚会下一打二十方一、従レ朝至レ暮、只在二僧堂中一不レ出二戸庭一。縦入二衆寮一至二後架一、袖レ手当レ胸、徐来徐往、更不二左右顧一、目前所レ視不レ過二三尺一。洞下尊宿要レ教二人看一狗子無仏性話一、只於二雑識雑念起時一、向二鼻尖上一軽軽挙二一箇無字一。纔見二念息一又却一時放下著。只麽黙黙而坐、待二他純熟久久自契一。洞下門戸、工夫綿密困レ人、動是十年二十年不レ得レ到レ手、所以難二於嗣続一。(『雪巌和尚語録』巻二「仰山普説」)

とあり、曹洞禅者が多く黙坐に親しむまでの学人接化の方便として、無字を重んじていたことを伝える。したがって、同じく無字を用いるにしても、それは見性に力点を置く看話禅でいう無字の参究とは、少しく意を異にしていたものとみられるのである。

第五に問題となるのが戒律・清規の面である。黙照の禅旨とか五位頌などは、高尚な宗旨を示すものであり、それが直ちに初心・晩学にそのまま受け入れられるものではない。ここに実際問題として、叢林の規矩・清規の面がどうであったかが問題となるのである。

ちなみに随州(湖北省)の大洪山保寿禅院は、大洪報恩によって律院が禅院に改められたものである。その報恩には

『授菩提心戒文』や『落髪受戒儀文』という受戒作法などを示した著述があったとされ[20]、またその法嗣たる大洪浄厳守遂（1072～1147）には『仏祖三経注』（とくに潙山警策注）が存する。さらに再興曹洞の重鎮たる芙蓉道楷に『祇園正儀』が存することによっても、そのころの曹洞系が叢林の規矩を重んじていたことが窺われる。

江南に下って、一大拠点たる長蘆寺[21]は、それまで雲門宗の人々によって維持されてきた大刹で、とくに『禅苑清規』の編者たる慈覚大師宗賾の住持地でもあった。しかも真歇の入寺とともに会下の大衆は一七〇〇にも満ちたとされるから[22]、その大集団を維持する上にも、当然、規矩が重んじられていた筈である。宏智の天童山においても同様であろう。また真歇が開山となり、宏智下の慧暉が二世となった慶元府昌国県（後世の定海県）東海上、普陀洛山の梅岑山観音宝陀寺も、それまでは律寺であった。慧暉に

自得曰、大智禅師特叛二清規一、扶二救末法比丘不正之弊一。由レ是前賢遵承挙挙奉行、有二教化一、有二条理一、有二始終一。紹興之末、叢林尚有二老成者一、能守二典刑一、不三敢斯須而去二左右一。近年以来失二其宗緒一、綱不レ綱、紀不レ紀。雖レ有二綱紀一安得而正レ諸。故曰、挙二一綱一則衆目張、弛二一機一則万事堕。殆乎綱紀不レ振、叢林不レ興。惟古人体レ本以正レ末、但憂二法度之不一レ厳、不レ憂二学者之失所一。其所レ正在二於公一。今諸方主者以レ私混レ公、以レ末正レ本。上者苟レ利不レ以レ道、下者賊レ利不レ以レ義、上下謬乱、賓主混淆、安得二衲子向レ正而叢林之興一乎。（『禅林宝訓』巻四「与二尤侍郎一書」）

という侍郎の尤袤（1127～1194）に与えた書簡があるが、その中で慧暉は、古くは百丈懐海（大智禅師749～814）の古規を慕い、近くは真歇・宏智ら紹興年中の厳正な叢林の規矩を重んじている。こうした流れがのちに永平道元の『永平清規』へも受け継がれていくのであろう。

第六に、江南曹洞の人々は、行持綿密できわめて師資相承を重んじていたことが挙げられる。もちろん禅家はどの派も嗣承を重んずるわけであるが、とくに当時の曹洞系が厳峻な嗣承を唱導した背景には、かつて大陽警玄の法門を、投子義青が面授ではなく臨済宗の浮山法遠（991～1067）を通して代附により伝えたという、歴史的事実の不利面に対する反動・克服が強調された為ともみられる。とくにそれは、法門が振わなくなるにつれ、より顕著になっていくようで、容易に嗣承を許さない厳格な一種独特の孤高な気風が、この集団にあったものとみられる。

如浄が嗣法を容易に許さなかったことは著名であるが、先に示した無準下の雪巌祖欽が宏智派の短篷遠に参じた折の回顧でも、曹洞下がきわめて工夫綿密に黙坐自契を重んじ、みだりに嗣承を許さなかったことを伝えている。ちなみにこれ

を、わが道元の、

しかあるに一類の狗子あり。尊宿のほとりに法語頂相等を懇請して、かくしたくはふることあまたあるに、晩年におよんで官家に陪銭し、一院に討得して住持職に補するときは、法語頂相の師に嗣法せず、当代の名誉のともがら、あるひは王臣に親附なる長老等に嗣法するときは、得法をとはず、名誉をむさぼるのみなり。かなしむべし、末法悪時かくのごとく邪風あることを。(『正法眼蔵』「嗣書」)

とか、虎丘派の虚堂智愚の、

在二今天下一望レ風承嗣者如二麻粟一。若一一患レ疽而殂、何時是了。且其間識二因果一知二来自一、又作麽生。(『虚堂録』巻四、「霊隠立僧普説」)

といった、当時の禅林の嗣法の乱れた状況に対する批判と対比して眺めるとき、興味深いものを覚える。(23)

こうした師資相承の厳峻さとともに、いま一つ、この集団の人々にみられる一面として、第七に隠山閑居の気風が挙げられる。

この隠山の気風は、古く遠源は唐代の石頭希遷(700〜790)の「草庵歌」や、石頭・薬山系の人々の一連の「楽道歌」などにあろうかと思われ、近くは『祇園正儀』にみる芙蓉道楷の枯淡な行履や、宏智の「至游庵銘」に窺えるものである。すなわち道を楽しむ、道に逍遙(至游)するという一面である。慧照系の不群清越は出世開堂を願わず、鼓山の西庵に隠閑すること四〇年にも及んだとされ、また如浄の法嗣雪屋正韶も、廬山に入り、山川風月を好み、

築二庵山阿一鑿レ池引レ泉、環以二幽花細竹一、夷二猶其間一以遂レ所レ楽。(中略)師蕭閑凝遠有二晋唐人風味一。工二歌詩一託レ物寄レ興、陶二写其胷中至楽一、意在二言外一。(『無文印』巻五「天池雪屋韶禅師塔銘」)

と示されるように、大自然を友とする晋唐人のごとき風味があったとされる。果せるかな、清越も正韶も灯史には名も記されることなく世を終えた。如浄の場合も、

和尚或時召示曰、你是雖二後生一頗有二古貌一、直須下居二深山幽谷一長中養仏祖聖胎上、必至二古徳之証処一也。(『宝慶記』)

帰レ国布レ化、広利二人天一。莫レ住二城邑聚落一、莫レ近二国王大臣一。只居二深山幽谷一接二得一箇半箇一、勿レ令二吾宗致二断絶一。(『建撕記』)

とあるように、山居を好み、道元にもそうした面は受け継がれていく。ただ如浄・道元においては、山居が単なる楽道に終らず、一箇半箇の真箇の道人を育成するあり方として、より強調されているのである。しかし、隠山といっても、南宋代や元代の禅院が、大むね官寺か官僚士大夫(檀越)の外護を受ける寺であることから、勅請や官僚の招請をむげに断わり、禅僧のみが世外に超然たることなど許されなかった筈で

ある。すでに如浄などもそうであった。五山・十刹・甲刹などへも、曹洞系禅者で入寺している人がかなりみられることによっても窺われる。

これに関連して、第八に儒仏道の三教問題が考えられる。宋代の文人士大夫は、等しく儒教への造詣が深く、時あたかも宋学の興起とも相俟っている。外護の檀越が儒・道に親しんでいる人であれば、禅者のみがこれを無視することなどできない。たとえば宏智が開堂出世した泗州（安徽省）の普照寺などは、

又二年、住二泗州普照一、実始出世、嗣二法淳和尚一。前レ此分二寺之半一為二神霄宮一。（「宏智禅師行業記」）

とあり、北宋末の徽宗の道先仏後の政策の下に、寺院の半が道教の廟たる神霄宮であった。[24]

ちなみに金末から元初にかけて北地に活躍した万松行秀は、その著『従容庵録』にて、

今人見二天童用二荘子一、便将二老荘一雷二同至道一。殊不レ知二古人借レ路経過暫時光景一耳。忽有四箇出来道三荘子豈不レ知二首山行履処一、但向道、月落三更穿レ市過、是外篇、是内篇。（第七十六則「首山三句」）

と、宏智の禅風の一面を評している。宏智には老荘の常用語句、とくに『荘子』の影響が顕著である。あるいはそれは『肇論』などを通しての影響かもしれないが、宏智禅がきわめて儒家や老荘などの諸思想（語句）を禅的に転用しているのは事実であろう。三教一致説に立脚していたとはいえないまでも、儒教や老荘への造詣が深かったとみるのが妥当であろう。また如浄などにおいても、

拈二請疏一。瞿曇頂骨、夫子眼睛。両彩一賽、王振金声。（『如浄録』「清涼寺語録」）

という表現があり、三教問題は表向き度外視できないものであった。わが道元のような潔癖さ、三教一致思想への明解な批判などはみられない。中国と日本の土壌・習俗の相違から来るのであろうか。

第九に、三教問題とともに宋代禅宗全般の特徴ではあるが、曹洞禅者にも文学的趣向が顕著である。とくに大慧派の詩僧無文道璨（？～1271）をして、

曹洞諸老、以二真履実践一与レ道為レ配、溢為二語言一、葩華流麗如二透レ花春色一。（中略）眼正句活汔伝二洞宗正印一、甚矣、未レ易下以二語言一観上也。（「天池雪屋韶禅師塔銘」）

と評せしむる程に、かなり格調の高いものであったとみてよく、宗旨を詩文（頌）に表現する才に秀でていた。この面を行秀の『従容庵録』は、

一等異苗翻茂、密固二霊根一、得二芙蓉一而宗派中興、至二天童一而文彩方備。（第四十九則「洞山供真」）

と評し、宏智の文才を位置づけている。ちなみに纏まった頌

古の存する人として、投子義青・丹霞子淳に互して宏智の名が挙げられ、如浄や雲外雲岫にも存するほか、『禅宗頌古聯珠通集』を通して、さらに芙蓉道楷・枯木法成・闡提惟照・真歇清了・慧照慶預・聞庵嗣宗・自得慧暉・石窓法恭・古巌堅壁・孤峰慧深・東谷妙光らにも、大部ではないにしろ、ある程度まとまった頌古が存したことが知られる。[25] また宏智と雲岫には拈古も存する。

如浄下の無外義遠や雪屋正韶は詩僧としても名を馴せ、[26] 慧暉の法嗣たる雪竇徳雲は、雪竇重顕（980～1052）の『雪竇明覚禅師語録』を重刊している。[27] また「雲外和尚語録序」にて、象山文学掾の陳晟は、

其為レ詩有二盛唐渾厚之風一。其為二序跋疏論一則文彩璨然。至二於偈頌拈賛之類一、余雖レ不レ能二尽通二其義一、以レ意観レ之、皆非二苟作一也。吁、徳行人之根本也。言語特二其枝葉一耳。末レ足二為レ師止一也。

と雲岫の詩文に長けた様を評している。総じて江南曹洞の人々は、言語文学を駆使して宗旨の緻密さを表すことを重んじていたといえよう。ただ如浄の場合は、若干これと相違している。如浄と同郷の桐栢散吏の呂瀟は、

五家宗派中、曹洞則機関不レ露、臨済則棒喝分明。苟得二其由一門戸易レ入。雖二取捨少異作用弗レ同、要レ之殊レ塗一レ致耳。惟天童浄禅師不レ流不レ倚兼而有レ之、自成二一家一八面受レ敵。（中略）至二於一偈一頌一話一言一、呼レ風吐レ雲、轟レ雷掣レ電、千態万貌不レ可二窮尽一。近世尊宿絶無二僅有者一。（「如浄禅師語録序」）

と語り、無文道璨が、

嘉定間、浄禅師偈二足庵之道于天童一、懼下洞宗玄学或為二語言一勝上、以二悪挙痛棒一陶二治学者一。肆レ口縦レ談擺二落枝葉一、無二華滋旨味一、如二蒼松架レ壑風雨盤レ空。曹洞正宗為レ之一変。（「天池雪屋韶禅師塔銘」）

と評しているように、如浄は言句文字（文字禅）に堕し易き曹洞系の一面を是正せんとしたことが知られる。宏智の文章が、円やかで整った文学的に洗練された格調の高さを特徴とするのに比して、如浄の文体は、淳朴で粗く、装飾を嫌う棘々しい性格がそのまま文章に表われている。言句に捕われず、厳格な学人接化を常に念頭においていたからともいえる。

以上、江南曹洞の特質として、(1)黙照禅の唱導、(2)打坐の強調、(3)曹洞宗旨の鼓吹、(4)対看話禅の意識、(5)清規・規矩の重視、(6)厳格な嗣承、(7)隠山楽道の気風、(8)儒家・老荘への造詣と三教問題、(9)文学的趣向、の九面を挙げてみた。[28] 江南曹洞独自のものもあれば、宋代禅宗全般の特質もあろう。その一々を同時代の臨済宗などの諸派と比較することや、中国曹洞宗全体の流れの中から捕えることが必要であろう。ま

た、その門風を受けている筈のわが道元が、これらの面の中、いずれを取り入れ、いずれを切り捨てていったのかということは、さらに興味深い。江南曹洞と道元禅との相違の是非は、一に中国と日本の政治や社会の構造の違いや、置かれた時代背景の違いにも起因することであるから、一概に判断は下せない問題である。

とくに今回は江南曹洞の概観を述べ、その特徴的な面を窺ったにすぎない。したがってかなり独断的取捨に終始してしまった面も多く、その一々はいま少し詳細に考察してみないと明確ではない。すべて後日を期したい。

おわりに

江南曹洞の系譜は、一二世紀初頭に真歇・宏智らにより浙江の禅林を中心に形成された。南宋初期にはかなりの隆盛をみたこの派も、南宋中期以降、如浄など特定の人物を除き、人材的に衰微していった。南宋末元初の動乱に際して、慧照や真歇の系統が断絶、ただ一系、元朝に及んだ宏智派も、元末明初にその法統を断つ。それが時代の延促によるものか、あるいは人物の盛衰・化権の隆替に関わるものか、なお判然としない。ともあれ宏智より一四世紀後半の梨洲景雲に至るまで、およそ二五〇年の間、江南曹洞はその命脈を綿々と保持していたことになる。奇しくも、永平道元・東明慧日・東陵永瑛の三師によって、その禅旨は日本禅林に導入され、林下あるいは五山派にして、それぞれ独自の展開が為されたのである。

中国禅林において、江南曹洞の系譜が断絶した後、曹洞の宗旨を伝えたのは、北地曹洞―明清曹洞の一系である。とくにこの派は明末清初に比較的勢力を得て、江南へも進出し、臨済宗とともに後代へと受け継がれ、現今に及んでいる。

しかし、中国の曹洞宗の展開において、もっともその特色を発揮したのは、おそらく宏智らの時代ではなかったか。常に臨済宗に押されて、飛躍的な進展のみられなかった中国曹洞宗の流れの中にあって、宏智らが大慧などの臨済系に互して、独自の禅風（黙照禅）を唱導鼓吹して禅の正統を明示せんとした意義は、禅宗史上に特筆すべき事件であったといってよかろう。

〔未完〕

註

（1）代附とは、北宋末に大陽警玄が、自己の法統を後世に伝えるべき力量ある法嗣に恵まれずに示寂したため、その依託を受けた参学門人で臨済下の浮山法遠が、後に門人の中より投子義青を得て曹洞の宗旨を附嘱（代附）し、断絶に瀕した曹洞の命脈を保った事件。江戸時代には、面授を重んじる余り、卍山・面山らにより否定される風潮があった代附相承も、現在では、義青の語録や道楷・報恩らの塔銘を通して、歴史的事実として認められるに到っている。

(2) 「『攻媿集』にみられる禅宗資料」『(東方宗教』第39号)、「芙蓉道楷と丹霞子淳」(駒大『仏教学部論集』第3号)、「雪竇智鑑伝」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第4号)、「宏智広録考」(駒大『仏教学部研究紀要』第30号)、「慧照慶預と真歇清了と宏智正覚と」(駒大『仏教学部研究紀要』第30号)、「宋代禅宗史より見たる道元禅の位置」(『南都仏教』第39号)などが挙げられる。

(3) すでに多く石井先生により紹介されているが、一応これを列記してみると次のようになる。

投子義青「舒州投子青和尚行状」(『舒州投子青和尚語録』巻下)、芙蓉道楷「随州大洪山崇寧保寿禅院十方第二代楷禅師塔銘」(『湖北金石志』巻一〇)、大洪報恩「宋故随州大洪山十方崇寧保寿禅院第一代住持恩禅師塔銘」(『湖北金石志』巻一〇)、丹霞子淳「随州大洪山十方崇寧保寿禅院第四代住持淳禅師塔銘並序」(『湖北金石志』巻一〇)、枯木法成「宋故焦山長老普証大師塔銘」(『北山小集』巻三二)、浄厳守遂「浄厳和尚塔記」(『湖北金石志』巻一一)、慧照慶預「随州大洪山第六代住持慧照禅師塔銘」(『湖北金石志』巻一一)、真歇清了「崇先真歇了禅師塔銘」(『劫外録』所収)、宏智正覚「宏智禅師妙光塔銘」(『両浙金石志』巻九)「勅諡宏智禅師後録序」(『天童寺志』巻八)「勅諡宏智禅師行業記」(『宏智(広)録』所収)、明悟慶顕「大洪山崇寧保寿禅院第十一代住持伝法覚照恵空仏智明悟大師塔銘」(『湖北金石志』巻一二)、聞庵嗣宗「宗白頭伝」(『淳熙新安志』巻八)、大休宗珏「天童大休禅師塔銘」(『攻媿集』巻一一〇)、石窓法恭「瑞巌石牕禅師塔銘」(『攻媿集』巻一一〇)、足庵智鑑「雪竇足庵禅師塔銘」(『攻媿集』巻一一〇)、雪屋正韶「天池雪屋韶禅師塔銘」(『無文印』巻五・『柳塘外集』巻四)、雲外雲岫「天童雲外禅師伝」(『雲外和尚語録』所収)、無印大証「無印証禅師寿塔銘」(『雪竇寺誌』巻六上)「無印証禅師行状」(『雪竇寺誌』巻六中)

このほか『浄慈自得禅師録』巻末に慧暉の「塔銘」(石窓洪恭撰)を載せているが、史料的に問題がある。

(4) 闡提惟照や真歇清了・石門法真、下って無外義遠などは四川の出身である。

(5) 慧深と清越については永覚元賢編『鼓山志』巻三に

第三十七代孤峰禅師、諱恵深。閩県赤嶼人、姓馮氏。年十四依二大乗仏心和尚一剃落。参二大洪預和尚一得レ旨、克二雪峰首座一。後移主二正席一。未レ幾移二能仁一。紹熙癸丑九月遷二当山一。(中略)巳未四月謝レ事。嘉泰甲子五月、普説能揮レ偈辞レ衆。以レ筆一拍而化。瘞二于三昧塔院一。(『鼓山志』巻三、21a)

第四十七代不群禅師、諱清越。侯官陳古霊先生之裔。得二度于東禅融菴坦禅師一。早歳遊方歴二参名宿一。晚来二此山一、孤峰和尚命首レ衆。継居二西菴一四十余年、絶無二応縁意一。淳祐庚戌、北山和尚遷二雪峰一。次年府帥趙公、請主二本山一、開法嗣二孤峰和尚一。乙卯謝レ事。庚申三月示寂。闍維牙歯不レ壊、塔二于黄坑積翠菴一。(『鼓山志』巻三、24a)

と記載され、ともに福州の人である。慧深は『普灯録』では首座としか記されず、清越の名は灯史に見い出せない。

(6) 真歇晚年の愛弟子に澹堂徳朋(竹筒和尚)の名が知られる。その伝としては、

徳朋、本姓顧、塩官人。守璋弟子也。紹興十八年入二径山一礼二真歇了禅師一。夜宿二山下一、真歇夢二双月入レ寺。詰朝挙以白レ衆、頃之、朋至。心竊異レ之。相与問荅、機鋒峻密。朝夕講二論禅教一者凡四年、後因観為レ溜、以下杵通二竹節一有上声、豁然開悟。其徒因号為二竹筒和尚一。二十三年有レ旨住二崇先顕孝寺一。二十五年両宣入二慈寧殿一、陞坐挙二説般若一。高廟奇レ之賜二法衣一給レ牒度二其徒一人一。朋念二璋年高一、力丐退休。両載復得レ旨住二崇先一。又二年力辞而帰。乾道三年無レ疾卒。有二澹堂竹筒和尚語録一。（『咸淳臨安志』巻七〇、方外17a～b）

とあるのが最も古い。

（7）拙稿「如浄門下無外義遠について」（駒大大学院『仏教学研究会年報』第12号）参照。

（8）石井修道「慧照慶預と真歇清了と宏智正覚と」（駒大『仏教学部研究紀要』第36号）に依る。また『扶桑五山記』巻一「育王」に第一八世、『明州阿育王山続志』「先覚攻」に第一九世として載る「黙禅師」は、おそらく宏智の法嗣了黙であろう。ちなみにその先住は宏智下から黄竜派に転じた野堂普崇である。また宏智下の明慧に関しては、

明慧禅師、婺州人。初学二教観一、更レ衣参二天童宏智禅師一頓悟。住久挙為二首座一。歴二住名刹一。乾道丙戌冬、陞堂説法、竟白レ衆而逝。（『天童寺志』巻五）

とあり、簡略ながらその伝が知られる。

（9）拙稿「自得慧暉とその禅風」（駒大大学院『仏教学研究会年報』第14号）参照。

（10）「雲外和尚語録序」に

自二仏法離而為レ禅、禅有二五派一。今行二於四方一者有レ二、曰、臨済、曰、曹洞。然学レ禅者流多宗二臨済一、而曹洞為二孤宗一。以レ洞顕二于四明一者、正覚禅師宏智、其傑然者也。由レ是学者慕而師レ之。故宗レ洞者四明為レ多。

とあって、雲岫当時、曹洞の孤宗はほぼ慶元府（四明）の地に限られながらも、いまだ宏智以来の余勢を残していたことを伝えている。

（11）今枝愛真「曹洞宗宏智派の発展と朝倉氏」（『中世禅宗史の研究』所収）など参照。

（12）今枝「中世禅林の官寺機構」（前掲書、所収）参照。

（13）玉村竹二『五山文学』四頁、参照。

（14）石井修道「宋代禅宗史より見たる道元禅の位置」（『南都仏教』第39号）参照。

（15）たとえば『継灯録』巻一「太原府王山体禅師」章に、

迨二宋末一、天童浄公、一生不レ説二稟承一、至二臨終一始拈香嗣二雪竇一。考二其説法一、雖レ有二悟門一、但任意発揮而宗旨全失矣。故鹿門嗣二天童一、作二五位頌一、始用二偏中至一云々。

とある。天童如浄―鹿門覚の嗣承問題はともかくとして、五位（四は偏中至）の相承が北地曹洞に重んぜられていたことが知られる。

（16）石井修道「大慧宗杲とその弟子たち（六）―真歇清了との関連をめぐって―」（『印仏研究』第23巻一号）参照。

（17）前出「如浄門下無外義遠について」参照。

（18）前出「自得慧暉とその禅風」参照。

（19）『如浄和尚語録』「臨終拈香」

(20) 前出「大洪恩禅師塔銘」

(21) 雲門宗では祖印智福・長蘆法海・円通法秀・円鑑体明・広照応夫・長蘆鑑・浄照崇信・慈覚宗賾・祖照道和・長蘆法永などが住しており、曹洞宗では真歇清了・宏智正覚・妙覚慧悟・長蘆道琳、臨済宗では雪巣法一・大禅了明・且庵守仁・心聞曇賁などが住している。

(22) 真歇『劫外録』、宏智「行業記」、宗珏「塔銘」、智鑑「塔銘」など参照。

(23) 拙稿「虚堂智愚と南宋末禅林」(駒大大学院『仏教学研究会年報』第13号)参照。

(24) 道教を宗教上の基軸とした北宋末の徽宗が、政和七年(1117)に天下諸州に詔を下し、仏寺を「神霄玉清万寿宮」と為したもの。塚本善隆「道君皇帝の廃仏」(『中国近世仏教史の諸問題』〈塚本善隆著作集〉第五巻所収)参照。なお泗州普照寺は南幸して宏智に見えた徽宗により、神霄宮が禅院に返還されている。

(25) 『雪竇寺誌』巻二「山霊」には、足庵智鑑が雪竇山の勝景名跡を頌賛した一連の作品が記載されており、その文学的才能を伝えて余すところがない。

(26) 前出「如浄門下無外義遠について」参照。

(27) 五山版『雪竇明覚禅師語録』巻下、辟開に、

明覚禅師住二当山一三十余年、雷二霆諸方一。時天衣、方主中住。由レ是(若)沖・(宗)本・(法)秀・(応)夫、出而盛二其道於天下一。前レ此蓋未レ聞レ有レ刊二其語一。於二山中一者及レ是乃克レ為二之祖一。銭塘・福唐板本為レ優。具二透関眼一者閲レ之、可下以挹二清標於百載一啓中蟄戸於玄関上、廼知、正法眼蔵付嘱有在。

時開禧元年仲冬、雪竇住山徳雲謹序。

とある。永井政之「雪竇の語録の成立に関する一考察」(駒大大学院『仏教学研究会年報』第6号)参照。

(28) このほか、慶元府が、北宋の四明知礼(960〜1028)以来の趙宋天台の中心地として重きを為していたことや、『宝慶四明志』や『延祐四明志』などを通して、禅院・教院と共に律院も数多く存していたこと等を考慮するなら、当然そこに教禅交渉の問題などが想起される。また真歇に「浄土宗要」の作を伝えるが、これは真歇住山の長蘆寺が、それまで念仏禅志向の雲門宗の人々(法秀や宗賾ら)によって維持せられてきた事実とも無縁ではあるまい。江南曹洞における教禅交渉および念仏禅の問題もなお考察の必要が存するであろう。

※東陵永璵の生年を1285とするのは、鉄庵道生の『鈍鉄集』にある永璵の序に、延文四年(1359)七五歳であったと記していることによる。したがって日本への渡来は六七歳のときとなる。

江南曹洞略系譜並びに丹霞子淳下詳系譜

（住山地は推定も含む）

- 1032～1083 舒州投子義青
  - 1058～1111 随州大洪報恩
    - 随州大洪善智 ―― 紹興府天章　枢
    - 1072～1147 随州大洪守遂（浄厳大師）
      - 随州大洪慶顕（明悟大師）
      - 荊南府公安　愍
  - 1043～1118 汴州芙蓉道楷（定照禅師）
- ？～1117 東京浄因自覚（北地へ）
- 鄧州丹霞子淳①
  - 1064～1117 ①鄧州丹霞子淳（徳）
    - 2 唐州大乗利昇
    - 随州大洪慶預 1(3)4 1078～1140（慧照禅師）
      - 1 臨江軍慧力　悟
      - 2 饒州薦福　演
      - 2 泗州普照　充
      - 2 随州智門　雅
      - 5 信州鵞湖子亨
      - 5 随州大洪居寧
      - 2 随州大洪　先
      - 2 真覚　能
      - 1 福州雪峰孤峰慧深 ？～1204
        - 5 福州鼓山不群清越 ？～1260
    - 真州長蘆清了②
      - 慶元府天童正覚③
    - 1 処州治平　渭
    - 2 鄂州大陽　満
    - 2 廬山帰宗　明
    - 2 武当仏巌
    - 2 随州修山
- 1071～1128 鎮江府焦山枯木法成（普証大師）
  - 福州妙峰宝雲
    - 鎮江府金山　堅
  - 台州天封子帰
    - 廬山東林通理
- 太平州吉祥隠静法宣
  - 韶州南華　明
- 襄陽府石門元易
  - 1053～1137 紹興府天衣法聡
    - 無為軍吉祥元実
    - 紹興府能仁普禧
    - 紹興府石仏宗輩
    - 舒州投子道宣
  - 吉州青原　斉
- 福州普賢善秀
- 泐潭宝峰蘭提惟照 1085～1128
  - 廬山円通真際徳止 1100～1155
    - 興国軍智通景深 1090～1152（大死翁）
      - 衡州華薬智明
      - 衢州烏巨擬愍如懿
      - 袁州仰山　季
- 随州大洪守恭
- 筠州洞山道微
- 1091～1157 ③慶元府天童正覚（宏智禅師・覚夫子）（隰州古仏）
  - 1 真州長蘆妙覚慧悟
  - 1 福州亀山義初
  - 1 建康府保寧興誉
  - 1 4 1088～1151 ②真州長蘆真歇清了（悟空禅師・了菩薩）
    - 1 4 1091～1162 慶元府天童大休宗珏
      - 1 4 1105～1192 慶元府雪竇足庵智鑑
        - 1 3 1163～1228 慶元府天童長翁如浄（浄長）
          - 2 蘇州承天孤蟾如瑩
            - 2 蘇州虎丘石林　秀
          - 5 慶元府仗錫棘林　杷
      - 2 温州龍翔道暉
      - 2 温州幽岩了諒（子詠）
- 1085～1153 慶元府雪竇聞庵嗣宗（宗白頭）
  - 1 泰州広福微庵道勤
  - 2 慶元府翠巌宗静

1．燈史類に見録の人。
2．燈史類に名のみで無録の人。
3．語録・語要の存する人。③は存したことの伝えられる人。
4．塔銘・行状類の存する人。
5．特別の史(資)料（師の塔銘・行状や、寺誌・語録・文集のほか日本撰述の宗派図など）にのみ見い出される人。
※丹霞子淳下のみ。

- 1 3 常州善権法智
  - 1 紹興府超化　藻
  - 2 常州保安　超
- 2 剣州鳳凰世釗
- 1 真州長蘆道琳（林）
- 5 法潤
- 2 慶元府保福信悟
- 1 随州大洪法為
- 1 3 臨安府浄慈自得慧暉（輝）　1097～1183
  - 2 慶元府雪竇徳雲
  - 2 慶元府仗錫崇堅
  - 1 常州華蔵明極慧祚
    - 5 ?～1247? 蘇州承天短蓬　遠（遠鉄樾）
      - 1 真州北山法通（通烏頭）
      - 2 温州能仁寿崇（崇寿）
      - 2 潭州上藍祖卿
      - 2 福州寿山徳初
      - 2 福州神光道新
      - 5 建康府移忠伝卿
      - 臨安府崇先濟堂徳朋（竹筒和尚）（得明）　（3）5 ?～1167
    - 1 臨安府霊隠東谷妙光　?～1253
      - 1（3） 慶元府天寧直翁徳挙（一）
      - 5 蘇州万寿簪溪了広
    - 2 慶元府雪竇　瑞（明）
  - 2 慶元府雪竇文煥
- 5 慶元府育王了默
- 5 師秀
- 5 行従（従行）
- 5 清潭宗栄
- 2 慶元府広慧法聡
  - 2 慶元府普照　戒
  - 2 紹興府能仁　理
- 2 慶元府雪竇清萃（糜）
- 2 衢州烏巨正光
- 5 集成
- 5 道圜（円）
  - 5 紹興府能仁中翼
    - 1 慶元府光孝了堂思徹（徹白頭）
    - 1 襄陽府石門法真
    - 5 法海
    - 5 浄居寛照
    - 5 師全
    - 5 師儼
    - 5 子霊
    - 5 慶元府瑞巌石牕法恭（石窓叟）　1（3）4 1102～1181
      - 1 3 4 慶元府天童雲外雲岫（方嵒）　1242～1324
        - 日本円覚東明慧日（日本東明派）　1272～1340
      - 2 臨安府浄慈中庵重皎（日本東明派）
      - 2 3 臨安府浄慈古巌堅壁（如）
  - 5 慶元府瑞巌無外義遠
  - 5 慶元府華厳田翁　頃
  - 5 自庵師楷
  - 5 慶元府岳林凝翁師瑩
    - 日本永平道元（日本曹洞宗）　1200～1253
  - 5 蘇州霊岩以道　尊
    - （3）4 1202～1260 廬山天池雪屋正韶 — 5 若鳳
  - 日本南禅東陵永璵（日本東陵派）　1285～1365
    - 2 慶元府普陀大方　聘
    - 2 独木　昇
    - 2 愚庵　省
    - 1（3）4 1297～1361 慶元府雪竇無印大証 — 5 慶元府梨洲景雲（自鏡叟）（仏日圜明慧弁禅師）
    - 5 士惨